



精神科医  
瀬戸 睿

今「アイヒマン調査―イスラエル警察尋問録音記録―」(ヨッヘン・フオン・ラング編 小俣和一郎翻訳)を読んでいます。

アドルフ・オットー・アイヒマンは600万人ものユダヤ人を強制収容所に送り、ユダヤ人絶滅計画に関与した指導者の一人であり、父がアウシュヴィッツのガス室で殺されたレス大尉が、実に275時間に亘り話し合った内容が書かれている。冷酷な人間だけでは、

くれないこのアイヒマンは、何故誕生したのかを考察する為にも大事な内容であり、原爆を落とした米兵や、30万人ともいわれる中国人の南京大虐殺に加わった日本兵たちにもつながる人間考察の一助となるものである。

ラングは、前書きで「過去に何が起こったのかという事実と将来また起こるかもしれない可能性」を直視しないといけないと書いている。

アイヒマンは、自分は虐殺には一切関与していない、ただ、上の命令に従って行動しただけだと、一貫して主張してお

ります。彼の供述書から見ると、彼が今の社会に生きていけば、かなり有能で出来る存在と認められ、活躍される人でしょう。ヒトラーのもとナチズムに置かれていた時代の不幸な存在と考えられます。しかし、全く思想性がありません。

戦争がそれを作り生み、人間性を破壊してしまふ事実に対し、その戦争を起こさない社会を、如何に作り守らなければならぬかを現代社会に教えてくれていると、つくづく思い知らされています。

そして、アイヒマン的人間には、誰もなりうるし、そのことを自覚し、それを防ぐ方法を未来に託さないといけないのです。

